

① 《特集》 生成AIの「NPO流」活用法一広がる可能性と課題

⑪ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》
「持続可能な公共調達」って？

⑫ 《この人に》
佐藤 千矢子さん (毎日新聞専門編集委員)

⑭ 《V時評》
「ボランティアは偽善か？」に心を揺さぶられる

⑮ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》
ミラクルベイビーが教えてくれた「ギフトワーク」の光
萩原 なつ子
(立教大学名誉教授、公益財団法人ミダス財団 シニア・フェロー)

⑯ 《熊本地震 熊本発～現地から伝える「被災地の今」》
発災10年 創造的復興への道のり
樋口 務
(特定非営利活動法人くまもと災害ボランティア団体ネットワーク 代表理事)

⑰ 《現場は語る～コーディネート現場から》
大学ボランティアに関する実態調査から
——学生と地域をつなぐ支援のために

榎本 朝美
(東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター)

⑳ 《毎日NPO！山田発信 組織と事業の支援論》
サイコーの広報ツール！
活動報告書のポイント解説

山田 泰久
(公益財団法人日本非営利組織評価センター(JCNE) 業務執行理事)

㉑ 《情報ピックアップ》

㉒ 《シネマ/ライブラリー》
『ライフテープ』／書籍紹介

㉓ 《晴れ時々ボランティア》
岩井 順一郎 さん
(大阪府豊中市「雲遊の会」)

ヴォロを読む会

次回開催は2026年5月15日(金)12:10～12:55の予定です！



じぶんの町を良くするしくみ

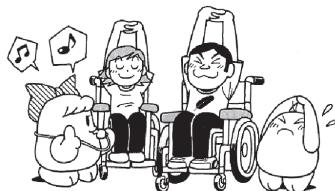
赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

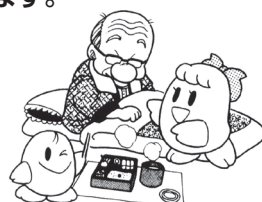
例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮ら
せるお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりをたやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」を助成テーマとし先進的などりくみを支援してまいります。また、地域福祉活動への「重点助成分野」を「誰をも受け入れ誰もが参加できる地域づくり」「健康でいきいきと暮らし続けられる地域づくり」「生きつらさを抱える子ども・若者とその家族への支援」「災害ボランティア活動・防災・減災活動への支援」「生活に困難を抱える人々たちへの緊急支援」とし、これらの活動を重点的に支援してまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人々たちを助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



じぶんの町を良くするしくみ。

赤い羽根おおさか

www.akaihane-osaka.or.jp/

募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

特集

生成AIの 「NPO流」活用法 ——広がる 可能性と課題

2022年11月のChatGPT登場以降、生成AIは急速に進化している。
企業・団体、学校、日常生活などで使われる場面が大きく増え、
市民活動も例外ではない。

本特集では、既に幅広く活用している先行事例を紹介するとともに、
生成AIのメリットと注意点、市民活動への影響や課題について考えたい。

特集メンバー▶早瀬 昇、増田 宏幸、百瀬 真友美

ウォロの新コーナーをAIに企画してもらったら……

「チャットGPT」と「ジェミニ」は、よく知られた生成AIツールだ。公開情報をもとに考えているなら、それほど違う答えにはならなさそうなものだが、実際はどうか。「同じプロンプトで聞く」という簡単な実験を試してみた。

なお、AIの回答は複数あったうち最初のもので、文章はいずれも筆者が整理し、主旨を変えない範囲で修正している（*は5ページの「用語解説」参照。以下、同）。

【プロンプト】
 ウォロという雑誌の編集をしています。
<https://osakavol.org/publishing/volo/index.html>
 日本でボランティアをする人が増えるような、1ページ分の新コーナー企画を考えてくれませんか。

チャットGPTの提案

「人生初ボランティアのリアル」というコンセプトで、毎月1人の「初ボ

ランティア体験者」を紹介。年齢・職業などが多様になるように取り上げて、体験の流れをマンガ風に図解する。コーナータイトル例は「わたしの初ボランティア」「はじめてのボラ日記」。

ポイントは、「すごい人」ではなく「普通の人」。心理的なハードルを下げることがねらい。

ジェミニの提案

「最初の一步」の不安と、それを超えた瞬間の心の動きにフォーカスするエッセイ・インタビュー。毎回、1人のボランティア経験者に「初めて参加した日の緊張」と「参加したことで自分の中に起きた小さな変化」を語ってもらおう。活動を始める際に背中を押したキーワードや出来事を紹介し、近いジャンルのボランティア募集情報や相談窓口のQRコードを付ける。

「ハードルが高い」「自分に何ができるかわからない」と感じている層の背中を押し、「これなら私にもできそう（やりたい）」と思わせる。

コンセプトは共に「ボランティアを始めるハードルを下げる」だ。内容は、チャットGPTが「体験の一連」ととれるのに対してジェミニは「初参加の日」で、時間軸の長短はあるが、違いはそのくらい。「最初のボランティア体験」を切り口に、1人のボランティアにフォーカスする点は共通する。「アイデアを求める」という使い方でもとになる情報が多い場合は、それほど差はないということだろうか。

チャットGPTの提案

企画名は「一歩目のボランティア」。

ハードルを下げることで、参加後のイメージを持つことが重要であり、関心はあるが最初の一步が踏み出せない人の背中を押し、超具体的な参加動線つきのコーナー。感動よりもできること・かかる時間・向いている人を見せて、「これならできそう」と思える誌面にする。

⑥ 増田編集担当が得た生成画像
 ⑦ 筆者が得た生成画像



毎月ひとつの活動を取り上げて「どんな社会課題に関わるのか」「初参加で何をするのか」「自分に合う参加の仕方」を示す。内容は、テーマ説明・3分でわかる活動・向いている人チェック・初めての人の本音、など。

こちらもコンセプトはほぼ同じ。内容も似ているが、今度は「人」ではなく「活動」に焦点が当たっている。

同じプロンプトで、参考にする情報も同じようなものと思われるのに、違いはなぜ生じたのだろうか。今回試した

市民団体に聞いたAI活用最前線

2人とも、日頃使っているAIに尋ねている。AIが、過去の質問者とのやりとりから興味・関心を推測し、合わせてきたのだろうか。だとしたら、普

段の自分の発想から離れたアイデアを求めたければ、プロンプトにその条件を入れるべきだとも考えられる。

ここまでの実験終了後、本特集の扉

ページのイラストをチャットGPTに生成させてみた。やや古めかしいイラストが表示された後、「もっと明るく」「日本的に」「人物を除いて」などAI

とやりとりしてブラッシュアップした。念のため言い添えると、本誌1ページの実際のトビラは、人間である誌面デザイナー担当、N氏が制作したものである。

生成AIは、日本でどのくらい使わ

れているのだろうか。総務省の2024年度調査(注1)では、個人として生成AIサービスを「使っている(過去使ったことがある)」人は26・7%(注2)。20代に限ると44・7%にのぼる。仕事での使用度はどうだろう。同調査では、生成AIを「業務で使用中」と回答した割合は55・2%だ。

グーグルでキーワード検索をすると、結果一覧の上部に生成AIの回答が表示されることが多い。「AIオーバービュー」(AI Overviews)という機能で、グーグルアカウントで利用しているときは標準設定になっている。ネット検索を使う人は、たいてい目にして

いるだろう。

そこで、「市民団体の事業や活動にAIを使っている人」にアンケートの協力を呼び掛けた。「使っている人」を対象にしたのは、普及度を調べるのではなく、どう活用しているのかを知るためだ。

高い貢献度と多様なツール

アンケートに協力してくれたのは7人。AIの活用が団体の業務に貢献していると思う割合は、「非常に貢献している」を5として平均4・7ポイントだ。5段階評価で全員が4か5を付けており、AIを活動に生かしている人たちの声といえるだろう。

アンケートでは、AI活用の用途は14項目の作業・業務を挙げて選んでもらった(表1)。それ以外の用途についても自由記入で尋ねたところ、さま

【表1】AIを使う作業・業務の例

※「⑮その他」の回答は筆者が整理し修正を加えた。

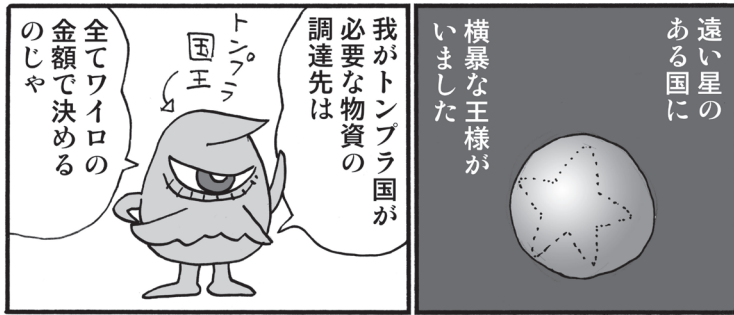
作業・業務例	利用者数 (n=7)
①検索がわりにちょっとした調べもの	4
②会議録作成	4
③助成金等申請書の文案作成	6
④メール文、連絡文書などの文案作成	5
⑤規約、契約書、定款などの文案作成	5
⑥翻訳	4
⑦文章の校正	7
⑧広報物等の記事文案作成	6
⑨広報物等のタイトル・見出し案作成	6
⑩イラスト・漫画・写真などの画像生成・加工	6
⑪チラシ・ポスター等のデザイン案作成	2
⑫プレゼンスライドの構成・デザイン案作成	4
⑬音楽生成・加工	4
⑭動画生成・加工	3
⑮その他(自由記述)	
▽企画等のアイデア出し、壁打ち*	
▽活動の手順を生成	
▽専門用語を含むニュースや行政文書を「やさしい日本語」に翻訳	
▽アンケート回答の分析	
▽団体内のマニュアル作成	
▽動画による操作マニュアル作成	
▽プログラミング(GAS=Google Apps Scriptを使ったメールの自動返信、カレンダー・スプレッドシート管理など)	

ざまな用途が挙げられた(表1⑮)。使っているAIツールをいくつでも挙げてもらうと、チャットGPT、ジェミニは各5人で最多。次いでクロード2。

(注1)総務省「国内外における最新の情報通信技術の研究開発及びデジタル活用の動向に関する調査研究の請負 成果報告書」2025年3月。調査委託先はエヌ・ティ・ティ・データ経営研究所。調査期間は2025年1月17日～2月13日。(注2)2023年度の調査では9・1%だった。

うお3君の 気にな〜る ゼミナール

Vol. 147 「持続可能な公共調達」って？



「公共調達」とは、政府や地方自治体・公共機関が物品やサービスを購入し、調達することを指す。公共調達は多くの国でGDPの13〜20%（日本は16〜18%）を占めるため、市場や企業に大きな影響を与える。つまり、公共調達が全て「持続可能なサービスや製品」になれば、持続可能性を高める大きな一歩となる。

公共調達の重要性は1992年の地球サミット（国連環境開発会議）を契機に環境政策として議論が始まり、2000年代以降は社会・経済の要素も含んだ「持続可能な公共調達（SPP）」へと広がった。15年以降はSDGs実現のための重要な政策と位置づけられ、SDGs目標12「つくる責任、つかう責任」がそれに当たる。

欧州では「戦略的公共調達」として環境基準（GPP）の策定や、外部コンサルタントによる社会監査など具体的な取り組みが進んでいる。特にドイツは、国際競争力を高めるための経済戦略として環境規制を位置づけている。日本政府の取り組みは人権が中心で、包括的な持続可能性の文脈は残念ながら無い。

東京都が「持続可能な公共調達」を明確に政策手段として位置づけた「東京都社会的責任調達指針」を25年に策定したが、地方自治体では少数。地方自治体は公共調達の重要な存在だ。方針を作り調達プロセスを変えるなど手間はかかるが、コストはさほどかからないのだ。

NPO法人AMネット事務局長
武田 かおり

NEWS

大阪府共同募金会の助成申請受け付けのお知らせ

① 赤い羽根共同募金助成金

対象：大阪府内で行う民間社会福祉事業、更生保護事業、その他社会福祉を目的とする事業を行う法人・団体が、2027年度（27年4月〜28年3月末）に実施する事業
受付：2026年5月1日（金）〜20日（水）

② 河原林富美福祉基金助成金

（2026年5月29日（金）まで受け付け中）
○ ボランティア活動支援事業
対象：大阪府内にて広域で福祉ボランティア活動を行い、一定の要件を満たす団体が、2026年度（26年8月〜27年3月末）に実施する事業
○ 社会福祉協議会への地域福祉活動促進事業
対象：大阪府内の市区町村社会福祉協議会が、2026年度（26年8月〜27年3月末）に実施する軽自動車購入事業または地域福祉活動促進事業

①②とも、詳しくは大阪府共同募金会ホームページをご覧ください。



【問い合わせ Eメール】
ai-kibou@akaihane-osaka.or.jp
（件名に「助成金の申請について」と明記）

～市民視点の映画を紹介する

緩やかなビートによって、ある家族の日常が映し出される。それがなぜこんなにも穏やかで、多幸感に包まれているのだろうか。「ライフテープ」は、ある夫婦と「メンケス病」という難病を抱えた息子の日常を描き出したドキュメンタリー映画である。こう書いてしまうと、途端にこぼれ落ちてしまうものがありすぎて困る。「家族を撮ってほしい」と親友から言われた安楽涼監督が、少しずつカメラを回すところからの映画は始まる。そこには平穏な家族の時間が記録されていた。談笑しながら息子の世話をし、散歩をする。どこの家庭にもあるような、ありふれた愛おしい時間。息子の難病は、治療しないと3歳ごろまでに亡くなる可能性が高く、根本的な治療法もない。日々のケアの

大変さも、出産から現在までの大きな不安や戸惑いも描き出されていく。しかし、そこには悲壮感や憂鬱さはない。圧倒的にこの映画を下支えしているのは、その大変さを慈しむような優しさと正直さなのである。息子と接する時や夫婦での何気ない会話から、この家族が時間をかけて築いてきた信頼を感じるることができる。そして映画に出てくる人たちは皆、自然体で明るい。息子の存在はもちろん、友人や監督もとても親密でありながら、互いに思いやっていることが伺える。その距離感がとても心地よいのである。映画に出演した人たちも、作る人たちも皆、当たり前のように続くと思われているこの日常を幸せに過ごすために、祈るように映画

を作ったのだ。そして映画の中盤1カット長回しで映し出される夫婦の会話がある。切実さと正直さが詰まったような夫婦の会話が、カメラの前で交わされる時、私はこの夫婦の覚悟のようなものを感じた。映画に撮られること、自分たちの日常をさらけ出すことへの覚悟。それは監督への信頼がなければ成立しえないことだ。まさに祈るように撮影されたシーンだった。とても陳腐な表現ではあるが、人は幸せになるために生まれてきたのだと改めて感じる。そしてその幸せは、ある時には誰かが与えてくれるかもしれないけれど、やっぱり自分(たち)で作るものなのだ、そんな当たり前のことを、何度も何度も思い出させてくれる。素敵な映画であった。



©「ライフテープ」製作委員会

出演：隆一 朱香 珀久 フィガロ
監督・撮影・編集：安楽涼
プロデューサー：大島新 前田亜紀
音楽：RYUICHI (EP「LIFE TAPE」より)
製作：すなはじりSTUDIO
制作協力：ネツゲン
配給：東風
2025年 | 101分 | 日本 | DCP | ドキュメンタリー
3月28日より全国順次公開

●今月の館主

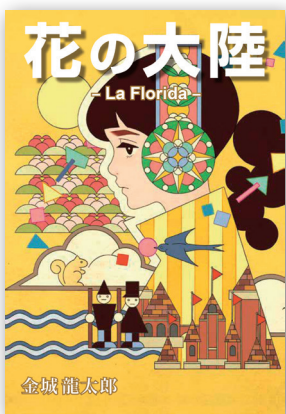
しまだりゅういち
島田 隆一

2012年、監督作『ドコモイケナイ』で日本映画監督協会新人賞受賞。監督最新作は『二十歳の息子』(23年公開)。プロデュース作品に『桜の樹の下』『帆花』がある。現在、日本映画大学准教授。「ドキュメンタリー映画って、観るよりも作る方が数十倍面白いよ!」といつも思います。



イラスト：杉浦 健

今月の作品 『ライフテープ』



花の大陸-La Furorida-
金城 龍太郎著
南山舎、2025年12月
1980円(税込み)

2038年。アメリカ南部の州立大学で働く27歳の女性、フロリタのもとに日本から届いた郵便。中身は解読できないUSBメモリと「キンジョー死す」の知らせだった。学生時代、彼女は「南国革命」について研究していた。それは約20年前の沖縄・八重山諸島、石垣島の市民運動を発端に、沖縄から米軍が撤退するなど各国の脱軍事化が一挙に進んだ歴史的変革だ。当時、中国による台湾有事に備え、日本政府は石垣島での自衛隊駐屯地配備を秘密裏に計画。それを知った島民有志が呼びかけたのは「住民投票」だった。政府制定の配備地の

是非を問う住民投票は実現、反対票が多数を占めた。そしてこの市民運動の旗手こそが「金城龍太郎、だったのだ。フロリタはUSBを携えて遠い石垣島に飛び、金城と同時に代を過ごした人たちに会う決心をする——。468ページの長編小説だが一気読みしてしまう巧みなストーリー展開。色彩表現の豊かさ、魅力的な人物描写。人気画家の中原亜梨沙が描く表紙も示唆に富む。石垣島生まれの著者、金城龍太郎はアメリカ留学を経て24歳で実家のマンゴー農園を継ぎ、4年後の2018年から24年まで「石垣島住民投票

を求める会」の代表として活動した。同会は市内有権者約36%の署名を集め、自衛隊の駐屯地開設の是非を問う住民投票条例の制定を石垣市に求めたが、市は拒否し、市議会は条例案を否決した。のちに金城らが起こした投票実施を求める訴訟も敗訴し、23年、自衛隊の駐屯地は石垣島に開設された。「自分たちのことは自分たちで決める」という市民自治の理念を推し進めた金城らの運動。この小説はそれらの軌跡を直接示すものではないにせよ、市民活動の記録の残し方に新しい道筋をつけたといえよう。編集委員 村岡 正司